

夏みかん物語



明治時代に「萩夏蜜柑輸出仲買商組合」が使用したレットテルを加工しています。
このレットテルを印刷した紙に包んで夏みかんを売っていました。

萩 市

夏みかんの始まり

夏みかんの最初の木は、長門市青海島の大日比（オオヒビ）という所にあります。

今からおよそ300年前に大日比の海岸に流れ着いた果実の種を、西本チョウが蒔いて育てたのが始まりとされています。（この原木は昭和2年に国の「史跡および天然記念物」に指定されています。）

実がなるようになると、その実を宇樹橘（ウジュキツ）、ばけもの、ばけだいだいななどと呼んでいたようです。

萩には、およそ200年前に榑崎十郎兵衛（江向）が大日比の知人から数個の実を送られ種を蒔いたという記録や、熊谷家（今魚店）で料理に使われていた記録が残っています。

1833年に杉彦右衛門（江向）が、大日比から持ち帰った2本の苗のうちの1本を、児玉惣兵衛（堀内）にわけました。1848年児玉家の木に実がなり、このことから児玉蜜柑と呼ばれ、収穫期が分からないためユズの代わりや観賞用としていたようです。

その後、児玉の子、正介がたまたま夏に食べた実が美味しかったので、13代藩主毛利敬親公に献上したことから、御前九年母（ゴゼンクネンボ）や夏九年母（ナツクネンボ）と呼ばれるようになりました。

夏みかんは江戸時代の終わり頃には、萩の武士や大きな商人の家などに植えられていたそうです。しかし、売ってお金を儲けるためではなく、自家消費のためだったようです。吉田松陰の松下村塾の周りにも夏みかんが植えられていたことが古い図面に記されていることから、ひょっとしたら松陰先生も夏みかんを食べていたかもしれません。

夏みかんの本格栽培の始まり

夏みかんの栽培が広まって、それを売ってお金を儲けるようになるのは、明治時代のことです。小幡高政という人が初めて夏みかんの栽培を広めました。

小幡高政は明治維新後、小倉県（現在：福岡県）の権令（現在：県知事）となりましたが、明治9年に萩に帰り、平安古に住みました。

この頃、藩からの禄を失い困窮した生活を送る武士を救うため、「耐久社」という会社をつくり、夏みかんの苗木を武士に配りました。

およそ10年後には、夏みかんの木は萩の空き地を埋め尽くすまで育ち、夏みかんは萩の特産物となり、山口県内のみならず北九州・広島・大阪、さらに東京へも出荷されるようになりました。

小幡高政の住んでいた家は、その後、総理大臣になった田中義一の別邸になり、平成14年に修復され、周辺の夏みかん畑をかんきつ公園として整備しました。ここには小幡高政が、この場所で夏みかんの栽培を始めたことを後世に伝えるために、明治23年に建てた石碑があります。この石碑には次のようなことが記されています。

「夏みかんの畠は、明治9年にこの場所で初めて開かれました。その後、木が増えて14年後の今ではこの畠の夏みかんの木は500本余りになりました。最初は私が率先して、夏みかんの栽培を広めました。その当時、萩で夏みかんを作るものはほとんどいませんでした。人は私が夏みかんを植えるのを疑いの目で見たり、あざ笑ったりしていま

した。しかし、今日、夏みかんの栽培が盛んになるにつれて、疑いの目で見たりあざ笑っていた人々も、少しの空き地があれば、みんな夏みかんを植えるようになりました。こうして夏みかんは萩の名産となり、全国の多くの人々に大変好まれ、評判の果実となりました。」

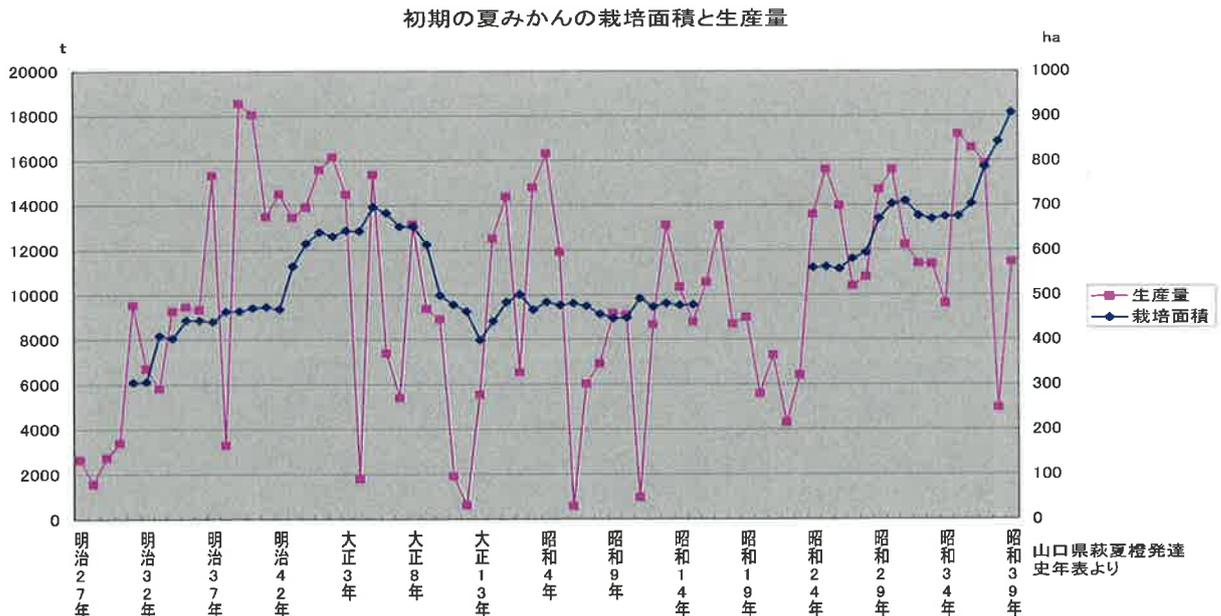
夏みかんの名の由来

夏みかんの学名は *Citrus natudaidai* HAYATA といいます。また、植物分類では ミカン科 ミカン亜科 ミカン属 ナツダイダイ といいます。萩では当初、橙（ダイダイ）又は夏橙（ナツダイダイ）と呼んでいましたが、明治17年夏みかんを大阪方面に出荷するとき大阪の仲買商人から「夏橙」の名称を「夏蜜柑」に変えるようすすめられ、以来商品名として命名された夏蜜柑が普及して、現在では夏みかんの名が定着しました。その改名の理由は、夏みかんの実を収穫しなければ、前年の実と今年の実が木になることから「夏代々」とも記しており、「代々」は「ヨヨ」とも読め、近畿地方では中風のことを「ヨイヨイ」と称して、夏代々を食べると中風になるといわれ、縁起が悪いので改名したのだそうです。

初期の販売出荷

始めは少数の人のみが夏みかんの木を植えていましたが、夏みかんが高く売れることがわかると多くの人々が夏みかんを作り始めました。明治27年には山口県全体の夏みかん生産量の内90%以上を萩で作っています。（全国でも生産量第1位でした。）

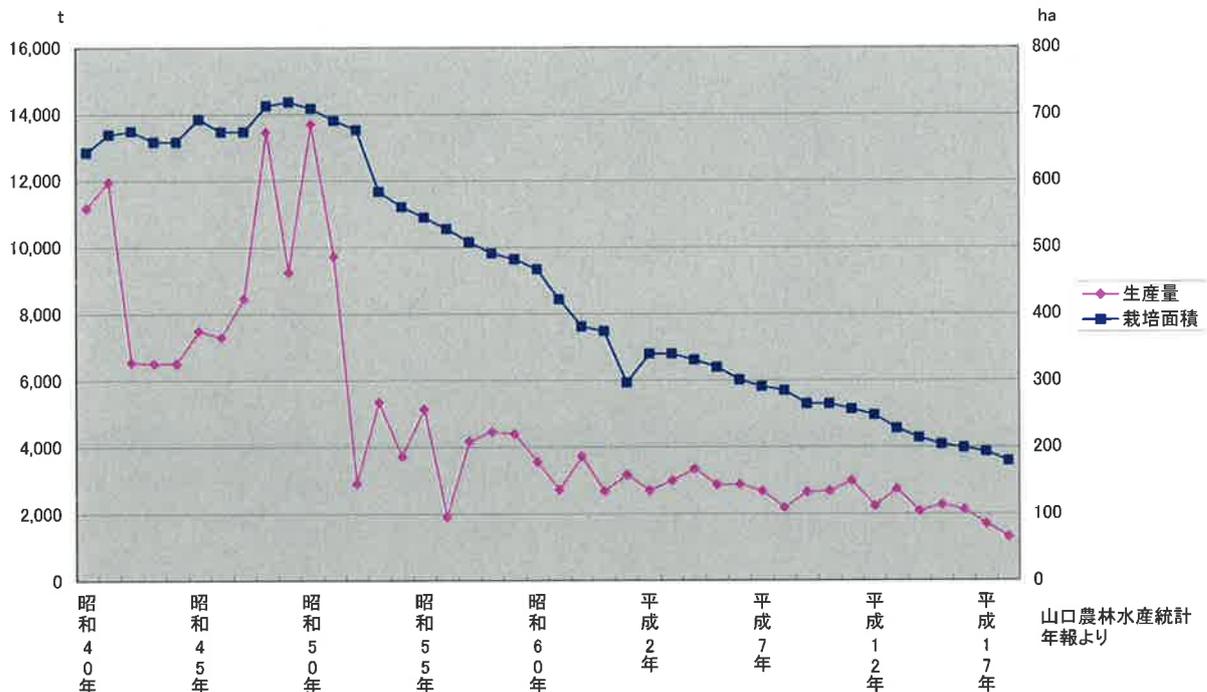
その後も萩は大正時代まで夏みかんの生産量が全国第1位でしたが、夏みかんを作れば儲かることが全国に知れ渡ると、ほかの地域でも夏みかんを作り始めたため、以前ほど儲からなくなり、だんだんと栽培面積が減っていきました。当時の夏みかんを作る人の大きな悩みは、寒い冬が来ると夏みかんが寒害に受け（中身がスカスカになる。）生産量が安定しなかったことです。



第2次世界大戦後の販売出荷

戦前に低迷していた夏みかん栽培は、国民生活の向上とともに人気が高まりで再び生産が増えました。特に昭和40年代に大規模な園地開発や寒害を防ぐ貯蔵法の開発などで夏みかん生産のピークを迎えました。しかしながら、昭和46年のグレープフルーツの自由化を境に従来の夏みかんの価格が低迷するようになり、輸入果実の氾濫や消費者に好まれる（甘く、食べやすい）新品種柑きつの登場などで産地が徐々に縮小してきています。

近年の生産量と栽培面積



夏みかん産地再生への取組み

萩は全国的な観光都市として知られ、「土塀と夏みかん」のイメージが浮かぶほど夏みかんは萩を象徴する果実ですが、従来の夏みかんはほとんど甘夏みかんに変わっています。夏みかんは全国で見ても萩でほんの少ししか作っていないため全滅寸前です。

そこで、萩市は平成21年4月に旧山口県萩柑きつ試験場の施設を利用し夏みかん再生への象徴的な施設として萩夏みかんセンターを造りました。センターは、萩の夏みかんを守っていく担い手の育成と夏みかんに関する情報を発信する役割をもっています。

そして、平成24年2月14日に柑きつの農業法人「株式会社萩耐久社」が設立されました。設立したのはセンターで2年間の担い手研修を受けた第1期生の2名です。

法人名の由来は、萩の夏みかん栽培の父である小幡高政が明治9年に帰萩、耐久社を設立、夏みかんの産業化に成功し萩を代表する名産品に育てたことから、再び萩の夏みかん産地の復興を目指す法人として社名が決められました。

代表取締役の水津さんは、「存続が危ぶまれる萩の夏みかんを、自分達の世代で生産基盤を固め、萩の夏みかんを全国にアピールしていきたい。」と抱負を述べておられます。

萩夏みかんセンターの概要

1. 土地 32,450 m²
 - うち市有地 30,758 m²
 - うち民有地 1,692 m²

2. 土地利用
 - 研修ほ場 20,700 m²
 - 施設用地（通路部分を含む） 11,750 m²

3. 建物
 - 本館棟外12施設 958.24 m²
 - うち本館 309.66 m²

なお、平成21年度に研修棟1棟（130 m²）整備しました。
建築事業費 26,764,500円

4. 職員数
 - 所長 1名、職員 1名
 - （研修業務等を株式会社萩耐久社に委託）

5. 研修生 新規就農希望者 1名（34歳）
 - 長期講習受講生 50名

6. 運営費 3,347千円（平成24年度）

7. センターの役割

萩夏みかんセンターは担い手対策として定年帰農者等を対象とした栽培技術講習会を定期的を開催するとともに新規就農希望者を研修生に向かえ、2年間の研修後には就農できるようサポートします。また、流通対策として観光都市萩の知名度を活用した消費宣伝活動を行います。ブランド力強化対策としては、「萩夏みかんセンター」を夏みかんの情報発信拠点とし、相談窓口の設置やホームページ (<http://hagi-natsumikan.com/>) を開設しました。

8. センターで栽培されている柑きつ

樹種	本数	備 考
夏だいだい	276	内苗木215
甘夏柑	315	内苗木20
せとみ	166	
はるみ	79	
ハッサク	36	
イヨカン	22	
ブンタン	19	
ゆず	37	
長門ゆずきち	13	
みかん	29	
品種見本樹	46	
合 計	1,038	

おわりに

再生への努力を始めたばかりですが、夏みかんの生い立ちから現在までの歩いた路にはドラマがあります。こんな果実が他にあるでしょうか。その時々々の要請に翻弄され、その存在が大きくなったり小さくなったり、少しかわいそうでもある可愛らしいニキビ面の果実です。

そして、今年も裏切らず香り高い白い花を咲かせました。